

# 「もみぢ葉もぬしなき宿は色なかりけり」

—— 古典語における「は」「も」の共起に関して ——

坂田 一 浩

はじめに

現代語において「AもBは」という形式をとる、

彼も数学は苦手だ。

そっくりな二人も、歯の色は違う。

あの鬼社長もカミさんには滅法弱い。

君もやる時はやるんだね。

右のような諸例には、共通した或る特徴的な意味構造が見出される。そしてそれは、ここに現れている助詞「も」「は」「が」それぞれ、「極端例の提示」および「対比・限定」という含みを帯びることによつてはじめて明示され得るものと考えられる。

本稿ではこのような現象と、その要因について、古典語、とりわけこの形式を意図的に修辞技法として用いたと見られる古典和歌に遡つて検証することをその目的とする。

一、「は」「も」の基本的意味用法について

以下考察を進めるに先だつて、ここでまず、古典語「は」「も」の基本的な意味用法について簡単に整理しておく。

まず「は」については、これまで主として現代語の研究において「提題」と「対比・限定」という二つの用法の存在が指摘されてきた。それはまた古典語においてもやはり確認され得るものである。

待ちがてにわがする月は(者)妹が着る三笠の山に隠れて  
ありけり(万 九八七)

まつ虫のはつ声さそふ秋風は音羽山より吹きそめにけり

(後撰 二五一)

ここにおはするかぐや姫は、重き病をし給へれば、え出で  
おはしますまじ。(竹取)

(以上提題)

ささの葉は(者) 名山もさやに乱るとも吾は(者) 妹思ふ  
別れ来ぬれば(万一二三三)

吹く風にあつらへつくるものならばこのひととはよきよ  
といはまし(古今九九)

かやうに憎からずは聞こえかはせど、け近くとは思ひよら  
ず(源氏 夕顔)

(以上対比・限定)

「提題の『は』は、ある語を当該のテーマとしてとりたてつ  
つ、題述構造を形成するものとして機能する。これに對して  
「対比・限定の用法」とは、他の事象との比較対照および拒斥  
性ということを強く示しつつとりたてるものである。

次に「も」の用法について一瞥する。まず、現代語において  
も一般的にみられるものとして、

(A) 春日野はけふはな焼きそ若草のつまもこもれり我もこも  
れり(古今 一七)

二日といふ夜、男、われてあはむ、といふ。女もはた、  
いとあはじとも思へらず。(伊勢物語 六九段)

(B) 白鳥の鷺坂山の松蔭に宿りて行かな夜も(毛) 更けゆく  
を(万 一六八七)

鶏も鳴きぬ。人々起きいでて…(源氏 帚木)

(C) 衣手にとりとどこほり哭く兒にも(毛) まされる我をお  
きていかにせむ(万 四九二)

大井河くだす筏の水馴棹見なれぬ人も恋しかりけり  
(拾遺 六三九)

あかず口をしと、いふかひなき法師童も涙を落としあへ  
り。(源氏 若紫)

のように、同類とみなされた事象を「も」によって提示する  
「単純他者肯定」(A)、(A)と違つて具体的な他の同類項が  
想定され得ない、いわゆる「柔らげの『も』」(B)、また同類  
のうちでの極端例を提示する、いわゆる「意外の『も』」(C)  
がある。さらに、

(D) 神の崎荒石も(毛) 見えす(不所見) 浪立ちぬ何處ゆか  
行かむよき路はなしに(万 一二二六)

かの人の御かはりに、明け暮れの慰めにも見ばや。  
(源氏 若紫) (願望表現との呼応)

かからでも有にしものを白雪の一日もふればまさる我が  
恋(拾遺 七二八) (条件表現との呼応)

これら、(D)の諸例に共通しているのは、いずれも文末に  
打消、願望等の非肯定表現を伴っているという点である。そし  
て「も」は最低限あるべき事象、あるいは同類事象のうちの軽  
い一例としての事象をとりたてている。また、

(E) はしきやししかる恋にも(毛) ありしかも(鴨) 君にお  
くれて恋ほしきおもへば(万 三二四〇)

のように、詠嘆表現との密接な関連を示している「も」も、古  
代語においては数多く見出される。ところで、以上見てきた  
ように、意味の面ではさまざまな様相を呈する古代語の「も」  
も、係り先の陳述表現との関わりという点から見れば、そ  
れと意味上密接な関わりをもつものと、そうでないものとの二  
つに大きく分けられる。すなわち、右に挙げた用法中(D)  
(E) は常に文末の陳述との密接な関連を示しているのであり、  
他方(A) から(C) は比較的文末の陳述に拘束されることが  
少ないものである。ここで試みに、

わが来つる方も知られずくらぶ山木々の木の葉の散るとま  
がふに

春霞たなびく野辺の若菜にもなりみてしがな人もつむやと  
の例において、「も」の係り先の打消なり願望なりの表現を肯  
定形にすりかえてみると、「も」は意味をなさなくなってしまう  
うか、或いは異なるニュアンスにすりかわってしまうのである。  
これに対して、さきに挙げた(A) ないし(C) の用法のものは、「も」  
が承けている事象を、表現主体が類例中どのような  
位置づけのものと認識するかによってそのニュアンスが決まる  
ものである。それはまた、前後の文脈や表現主体の事象把握の  
あり方に依存している。この点をとらえて、前者、すなわち

(D) および(E) を「陳述依存の『も』」、そして後者、すな  
わち(A) ないし(C) の用法のものを「文脈依存の『も』」  
と名付けることとする。

以上述べた、陳述との呼応のありかたから見た「も」の二大  
別は、「も」がまさに「係りの助詞」であるという点、またそ  
れが、「も」の意味とも密接に関連しているという点からしても、  
「も」の根本的性格に関わる重要な区分であると思われる。以  
下の考察においても、このことを大きな手がかりの一つとする  
であろう。

## 二、「AもBは」という形式の諸類型と、

### その意味構造

それでは次に、「AもBは」という形式(以下これを「モハ  
構文」と呼ぶ)について検討してみる。それにあたって、まず  
おのおのの係助詞が承けている成分によって用例を分類する。  
この形式は、「も」「は」が承けている成分の組合せから、次の  
四パターンに分類できる。

- 1、事物成分+「も」—— 状況限定(時・所・場合)成分  
+「は」(モハ1)
- 2、事物成分+「も」—— 状況限定以外の成分+「は」  
(モハ2)

3、状語成分十「も」——事物成分等十「は」(『モハ3])

a、位格成分十「も」

b、時格成分十「も」

c、接続助詞十「も」

4、副詞的修飾語十「も」(『モハ4])

以下その各々について用例を挙げつつ検討を加えてゆくこととする。

1、事物成分(主格・対格)十「も」——状況(時・所・場合)の限定成分十「は」

1花の木も今はほりうゑじはるたてばうつろふ色に人ならひけり(古今 九二)

2うちつけにさびしくもあるかもみぢばもぬしなき宿は色なかりけり(同八四七)

3「ひとりぬる時はまたるる」鳥のねもまれにあふ夜はわびしかりけり(同八九五)

4「さばへなす荒ぶる」神もおしなべて今日はなごしのはらへなりけり(拾遺一三四)

5岩間には氷のくさび打ちてけり玉るし水も今はもりこず

(後拾遺 四二二)

6思ふてふことはいはでも思ひけりつらきも今はつらしと

思はじ(同 七八六)

7「夕月夜ほのめく」かげも卯花の咲けるわたりはさやけかりけり(千載一四〇)

8さびしさも月みるほどはなぐさみぬ入りなむのちを訪ふ人もがな(同一〇〇八)

9「わけわびていとひし」庭の蓬生もかれぬと思ふはあれなりけり(同一一四五)

10「岩間とぢし」氷もけさはとけそめて苔のしたみづ道もとむらむ(新古今 七)

11「いそのかみふるのの」くさも秋はなほ色ことにこそあらたまりけれ(後撰三六八)

12「ちとせまでかぎれる」松も今日よりはきみにひかれて万代や經む(拾遺二四)

13「しののめの明けゆく」空もかへるには涙にくるるものにぞありける(金葉四二三)

14「ゆく秋のかたみなるべき」もみぢばも明日はしぐれとふりやまがはん(新古今五四五)

今これらの例を通観するに、この型に属するものには次の五点の顕著な特徴が指摘できる。

a、「も」は主格をはじめとする題目と見得る成分をとり

たて、かつ意外の「も」と見得るものが多い。

b、「は」は時、処などを表す成分を承け、「も」がとりたてた主題についてその状況を限定している。

c、「も」がとりたてている成分は、名詞修飾句を伴っていることが多い。

d、題目語と述部との間には、一種の逆態関係が成立している。

e、文末表現にはばらつきがあるが、概して、けり止めのものが多い。

以下、各項の意味するところを、相互に関連させつつ子細に検討してゆくこととする。

まず、この型においては、「意外の『も』 + 限定の『は』」の組合せの例が多く、そこには次のような興味深い意味構造が看取されるのである。今、

うちつけにさびしくもあるか **もみぢば** もぬしなき宿は色  
なかりけり

右を例にとつて説明する。三句目以下の大意は、「もみぢば」が主なき家においては、その色を失っている、というものであるが、ここで注意すべきは、「もみぢば」が「鮮やかに色づくもの」であるという、そのものが本質的にもっている、もつとも特徴的な属性、すなわち歌学でいうところの本意本情（事物

がその特色を最もよく發揮している状態『和歌大辞典』を背負っており、それを念頭に置かない限りこの歌の意味するところは殆ど解し得ないという点である。そして今、このような「もみぢば」の「本意」を踏まえて見るならば、述部の「色なかりけり」がその本意本情に反する振る舞いであることに気づく。つまり主部と述部の間にはある種の逆態性が感じられるのであり、「も」は、それを明示するものとして「意外」のニュアンスを帯びているのである。

一方で「は」もまた、このような意味構造の成立に深く関与している。さきに挙げた例でいえば、本来鮮やかに色づく「もみぢば」が「色なかりけり」ということは、そのままでは承認しがたい事態である。そこには何らかの特殊な事情を想定せざるを得ない。「は」が承けている「ぬしなき宿」という句は、まさにそのような特殊な事態についての言語表現なのであり、「は」はそれを承けて、「ソノ状況ニ限ツテハ」と、事態を強く限定しつとりたてている。すなわち、ここでの「は」は限定の用法を示している。

今述べたような意味構造は、ここに挙げたほばすべての例にわたって一様に認められるものである。こうして、  
「A（|| 題目語）モB（|| 状況限定成分）ハ……」  
というこれらの形式は、少しく言葉を補えば、「本来…デアルハズノAモ、Bトイウ状況ニ限ツテハ、ソレニ反シテ……」という風に解されるのである。この構造は、そこに現れている「も」

が意外のニュアンスを、また「は」が限定を示すことによりより鮮明なものとなる。「も」が題目部と述部との逆接性を明示し、かつ「は」がある状況を、限定の含みを帯びつつとりたてることによってその逆接性の論理的矛盾を解消し、容認度を保証しているのであり、この点で「も」と「は」の意味上の必然性は、かなり強固なものであるといえる。

また、このパターンのもに「けり」止めが多いという事実も、このような構造との関わりにおいて理解されるべきである。表現主体が抱いていた期待内容に反する予想外の事態をとりたてるこの形式は、事態に対する新たな発見を表明する「けり」ととりわけ結びつきやすいものである。

なおここで注意すべきは、題目部と述部との間にみられた逆接性は、「も」の承ける体言句が背後に担っている「本質的屬性」に裏打ちされてはじめて成り立ちうるものであるということである。より正確にいえば、両者の間に逆接的關係が成り立つためには述部の示す内容と逆接的關係にある屬性を、「も」の承けている体言句が背負っていることを必要とする。この点で、「も」の示す意外のニュアンスは、その前後の成分の意味上の關係性に強く依存しているのであり、もし述部の内容に対しうる屬性が「も」の上の体言句に見出されないならば、たちまち「も」は意外のニュアンスを担い得なくなるのである。そして、「も」の承けている体言句が担っている、このような屬性は、「も」が意外のニュアンスを帯びるためには必須のもの

のと考えられるのであり、現代語研究のサイドでは「期待」と呼ばれているものである<sup>36)</sup>。

ところで、この、「も」の承けている体言句が担っている「期待」の内容は、体言そのものによっては充分に暗示され得ない場合もある。また、その体言が示す外延のうち、ある屬性をもつたものに限って逆接性が成り立つといった場合もありうる。このような際には、期待の内容そのものを、言語表現としてあらためて明示しておく必要が生じる。「も」が承けている体言の多くに見られる連体修飾節は、まさにこのような「期待」内容の、言語としての顕現と見得るものである。そしてこのことと、さきに述べた、期待内容と述部の示す内容とが逆接の焦点となっているということとは必然的に、

〔岩間とちし〕**氷**もけさはとけそめて苔のしたみづ道もとむらむ

右の例のように、連体修飾節と述部とが言語表現上逆接の焦点となっているという事実を意味する。また、

〔ひとりぬる時はまたる〕**鳥のね**もまれにあふ夜はわびしかりけり

の例においては、「鳥のね」という一つの事象について、「ひとりぬる時」と「まれにあふ夜」という二つの異なった状況が、「は」によって対比されつつ、「も」の上下に対置されているのであり、「も」の上部の事象に対しても同じく「は」による状況の限定が加えられている。この例は、連体修飾節が表す内

容も所詮、述部の示す事態（「は」によってある状況に限定された）と対比される相対的な一事態に過ぎないということをも端的に示している。

この、「本来…であるはずの」という期待内容を「も」の上部の連体修飾節が表現しているというところは、

「ゆく秋のかたみなるべき」もみぢばも明日はしぐれとふりやまがはん

のように、節中に當為当然を表す「べし」が現れている例があることによつてもはっきりと窺われる。

以上のように「も」が承けている体言句中の連体修飾語は、体言の担つている、述部と対比されるべき「期待」の内容が言語表現として現れたものとみることができるのである。

以上の考察を踏まえた上で、モハ1、の表す意味は、あらためて次のように定式化できる。

「本来…：デアルハズノ」Aモ、Bトイウ状況ニオイテハ、（ソレニ反シテ）…：デアル

そして、和歌においてはこのような構造を、一種の修辭技巧として意図的に利用したと思われるふしがある。すなわち、4、7、9、11、12、13の各例ではそれぞれ「荒ぶる」と「なご（和）し」、「ほのめく」と「さやけかり」、「いとひし」と「あはれ」、「ふる（古る）」と「あらたまり」、「ちとせ」と「万代」、「明けゆく」と「くるる（暮るる）」というように、対概念をなす語がそれぞれ、「も」の承けている体言の連体句中と、述

部とに配されつつ、一種の対照法（contrast）を形成しているのである。

このように、モハ1、のパターンにおいては、「も」の前後、より正確には「も」が承けている主部と、述部との間にある種の逆接的な関係が認められた。この、逆接ということは一般的に、節と節の間において認められるものである。ところが、このケースでは体言句と用言との間にそのような関係が生じている。今これを、前者のようなケースも含めて「逆事態」と呼ぶこととする。

以上のように、モハ1、においては、意外の「も」+限定の「は」が発現しやすい。これは「も」「は」が承けている成分、および述部相互の意味的關係性によるところが大きいのである。

2、事物成分（主格、対格）「も」「は」——状況限定以外の成分  
十「は」

- 1 鶴龜もちとせのちはしらなくにあかぬ心にまかせはててん（古今 三五五）
- 2 あまのはらふみとどろかし鳴る神もおもふなかをばさくるものかは（古今七〇一）
- 3 はふりがいはふ社のもみぢばも標をば越えて散るといふものを（拾遺一一三五）
- 4 吹く風も花のあたりはこころせよ今日をばつねの春とや

は見る（金葉 三二）

5 ふう風も木々の枝をばならさねど山はひさしき声きこゆ  
なり（千載 六二二）

ここに挙げた諸例も、「も」の表現的機能に関してはモハ1と同様、逆事態の構成にあずかる意外の「も」であることが看取される。このことは、2や3のように、「も」の承けている体言が、期待内容の言語表出と見得る連体修飾語ともなっている点からも明らかであり、一方「は」についても、承けている成分に状況か対格かの相違はあるにせよ、事態、事象を限定する機能をはたしているという点に関しては同様である。ただ、この「は」による限定の作用が、逆事態の構成にあたってどのように機能しているかという点については、さきのモハ1とはその趣を異にする。すなわち、モハ1において、「は」による事態の限定は「も」の承ける体言句と述部との間にみられるそぐわなさを論理的に保証するためのものであったのに対して、ここに挙げた諸例では、「は」は逆事態の対立項中の成分をとりたてるはたらきをしていると見得るものが多いのである。たとえば3の例について、モハ1にならって「はふりがいはふ社のもみぢば」と「越えて散るといふものを」の間に逆事態の関係を見出そうとすると、いささかの外れとなる。「標をば」まで含めて「も」以下の述部全体を対立項と見ることではじめてその逆事態性が明確になる。この点で、「も」の承ける体言句と

「は」が承ける成分を除いた述部とで充分にこのような関係が感得されたモハ1とは相違しているのであり、これはこれらの「は」が、時格等の状況成分に比べて述語用言の意味構成により深く関与している対格を承けていることによるものと思われる。

6 ちとせまで君がつむべき菊なれば露もあだには置かじと

ぞ思ふ（金葉二四二）

7 なげきあまりしらせそめつる事の葉も思ふばかりはいは

れざりけり（千載六六〇）

8 ぬるがうちにみるをのみやは夢といはむはかなきよをも

うつつとはみず（古今八三五）

9 ふりにけりむかしを知らばさくら花ちりの末をもあはれ

とは見よ（千載一〇七一）

また、以上の例のような「は」が副詞（的成分）やト格を承けている例も含めたこのケースの諸例には、文末に打消、命令、反語、逆接表現をとるものが多く、かつそれが対比・限定の「は」のもつ拒斥性と密接に関わるものであることは注意を要する。



3、状況成分「も」——事物成分「は」

状況を表す成分としては、場所をあらわすもの、時をあらわすもの、また接続助詞によるものの三つがある。

a、位格成分+「も」——主格+「は」

まず「も」が場所を表す成分を承けている例からみてゆく（なおここには、その成分相互の關係のあり方の近さに鑑みて、「全体主格—部分主格」の例も含ませる。）。

- 1 「故郷となりにし」ならのみやこにも色はかはらず花はさきけり（古今 九〇）
- 2 たぎつせのなかにもよどはありてふをなどわが恋の淵瀬ともなき（同 四九三）
- 3 たねしあればいはにも松はおひにけり恋をしこひばあはならめやも（同 五二二）
- 5 「あしひきの山の山守もる」山もみちせさする秋はきにけり（後撰三八四）
- 6 「雪ふかき岩のかけみちあとたゆる」吉野の里も春はきにけり（千載 三）
- 7 蘆の根のうき身のほどと知りぬればうらみぬ袖も浪はたちけり（拾遺七七一）

8 草の庵なに露けしとおもひけん漏らぬ岩屋も袖はぬれけり（金葉 五三三）

9 てる月のかけさえぬれば浅茅原雪のしたにも虫はなきけり（同 二九五）

10 心なき身にもあはれば知られけりしぎたつ沢の秋の夕暮（新古今三六二）

モハ1のパターンにおいては、「も」の承けている体言句と述部とが逆事態の焦点であり、またモハ2では「も」の上の体言句と「は」を含む述部全体が対立をなしていた。これに対してこのパターンでは、「も」の承けている体言句と、今度は「は」の承けている成分とが逆事態の焦点となっているものが多い。換言すれば、場を表す語とそこにおける存在物とが逆事態を構成しているのであり、いきおい述部は、モハ1および2のパターンと比べて逆事態性の構成への関与が希薄である。このことは、述部の用言が、「あり」「なし」「来」「生ふ」「のこる」などの、存在、出来をあらわすものであるケースにおいて著しい。これらはその存在、出来の主体を前提としてはじめて意味をもちうるものであるから、いきおい、存在物を示す語が逆事態の焦点となってくるのである。

「も」が承けている場所語もモハ1と同様、期待内容を担っており、それは

「故郷となりにし」ならのみやこにも色はかはらず花はさき

けり

のように、場所語がともなっている連体修飾語においてやはり端的に表されている。

さて、この形式における「も」「は」「の」機能は一体いかなるものであるか。「も」はモハ1、2と同様、意外の「も」である場合が多い。これに対して「は」は、…という状況のなかにあつて、それとはそぐわない事物の存在をとりたてる「は」であり、このように逆事態を構成する語そのものをとりたてているという点においてモハ1の「は」とはその趣を異にしている。

b、時格成分+「も」——主格、対格+「は」

- 1 ふるさとの佐保の河水今日も猶かくてあふせはうれしかりけり (後撰一一八一)
- 2 ちはやぶる平野の松の枝しげみ千代も八千代も色はかはらじ (拾遺二六四)
- 3 時の間も心はそらになるものをいかですぐしし昔なるらん (同 八五〇)
- 4 限りありて別るる時も七夕の涙の色はかはらざりけり (同 一六四)
- 5 ながめつつ昔も月は見しものをかくやは袖のひまなかるべき (千載九八五)

6 命あればことしの秋も月は見つ別れし人にあふ世なきかな (新古今七九九)

7 そこはかと思ひつづけてきて見れば今年のけふも袖はぬれけり (同八四一)

以上挙げたケースでは、「も」が単純な暗示、いわゆる「単純他者肯定」として機能している場合が多い。これは、「も」が承けている時を表す体言の多くが、「昔」といえば「今」を容易に連想させるといったような、相対的な概念を表すものであるところからくるものであると考えられる。

c、接続助詞+「も」

- 1 恋ひつつも今日は暮しつ霞たつ明日の春日をいかで暮らさん (拾遺 六九五)
- 2 おくれてもさくべき花はさきにけりみをかぎりとも思ひけるかな (後拾遺一四七)
- 3 山彦の声にたてでも年はへぬわがもの思ひをしらぬ人きけ (後撰七九七)
- 4 時雨にも雨にもあらで君恋ふる年のふるにも袖は濡れけり (拾遺六八八)

以上の諸例においても、そのほとんどの「も」が逆事態を形成するものである。さらにそれが、接続助詞を承けているということから、「接続助詞＋「も」」全体で逆接の接続助詞と等価な表現となるのである。そしてここに現れている「は」のありようは、さきにもた位格＋「も」のそれと同じく、「も」がとりたてた状況にそぐわない事物をとりたてている。これに関しては次節において再び触れるであろう。

#### 4、副詞的修飾語十「も」

- 1 こりずまに又もなき名はたちぬべし人にくからぬ世にしすまへば(古今六三二)
- 2 とどめあへずむべもとしとはいはれけりしかもつれなく過ぐる齡か(同八九八)
- 3 もろともにおなじ都はいでしかどつひにも春はわかれぬるかな(千載 一三〇)
- 4 うへにのみおろかに燃ゆる蚊遣火のよにもそこにはおもひこがれじ(後撰九九一)
- 5 おしてるやなにはの水にやくしほのからくもわれはおいけるかな(古今八九四)
- 6 あやめ草ねたくも君はとはぬかなけふは心にかかれと思ふに(金葉 一二七)

右のように「も」が副詞的成分を承けている場合においては、逆事態性はほとんど感じられない。さらに、「も」が文末の打消、願望、詠嘆等の陳述表現と応じているものが多い。これは、「も」が承けている副詞の語性によるところが大きいものと思われる。すなわち、元來副詞は、逆事態性に対しては比較的ニュートラルな語である。また、ここで我々は、これらの例に、陳述副詞をはじめとする文修飾の副詞が散見されるという点にも注意しなければならぬ。文末の陳述と呼応する成分を承けているだけに、「も」もそれとの密接な関連を示すこととなるのである。今一つ、6、7のような、「形容詞連用形＋『も』」のケースに關しては、川端善明氏がこれらを一種の「逆述語」とみなされた上で、文末助詞の「も」との関連性を指摘しているということも、ここで考え合わせる必要があるであろう。また、「は」には限定のニュアンスが感知されにくい。むしろ題目提示に近いという印象を与えるものである。

### 三、他形式との比較

ここでは、関連するとみられる他の構文と比較することにより、当該のモハ構文のもつ特質を、さらに浮き彫りにしてみようと思う。

まず同じく「は」「も」共起構文でありながら、その出現順序を異にする、「AはBも」という形式(ハモ構文)と比較し

てみると、

春雨にいかにぞ梅やにほふらんわがみる枝は色もかはらず

(後撰 三九)

ひぐらしのなく山ざとの夕ぐれば風よりほかにとふ人もな

し(古今 二〇五)

人しれずおもふ心は春霞たちいでて君がめにも見えなむ

(古今 九九九)

恋ひてへむと思ふ心のわりなさは死にてもしれよ忘れがた

みに(後撰八二〇)

いによるものならなくに別れちはこころほそくもおもほ

ゆるかな(拾遺三三〇)

かきくらし雪もふらなん桜花まださかぬまはよそへても見

む(拾遺一〇三四)

のように、ハモ構文においては「題目提示の『は』+陳述依存の『も』」という組合せが多く、この点においてモハ構文とは対蹠的な傾向を示している。その要因として、ハモ構文においては、「は」が題目を提示する助詞として、「も」の上に位置した結果、「も」はより文末近くにあつて陳述表現との結び付きが強くなったためであると解せられるのであり、これに対してモハ構文の場合は「も」が「は」の上に位置していることにより、いきおい「も」は文末の陳述表現との関連性が希薄になり

やすく、むしろモハ2においてみられたように、「は」の方がそれとの密接な関わりを示すようになったものと考えられる。

ところで私はさきに、モハ3における、「も」が位格や接続助詞を承けているケースに関して、そこに現れた「は」が、「も」のとりたてている状況にそぐわない事物をとりたててものであることを指摘した。このような「は」の表現性は、

伊勢の海のつりのうけなるさまなれど深き心はそこにしづめり(後撰 一〇八五)

まめなれどあだ名はたちぬたはれ島よるしら浪をぬれぎぬに着て(同 一一二〇)

あしひきの山かきくもりしぐるれどもみちはいと照りまさりけり(拾遺二一五)

つらけれど人にはいはず石見瀧怨みぞふかき心ひとつに(同 九八〇)

右に挙げたような逆接接続助詞と共起したそれに非常に近いものである。そしてこの、「意外の『も』と、「は』」「ども」をはじめとする逆接の接続助詞とは、「も」の表す逆事態性からもまた「とも」「ども」がおのおの「と」/「ど」「+」も」をその起源とすることからもわかるように、その表現価値の点において共通の基盤を有するものと思われる<sup>15)</sup>。

ところで、逆接接続助詞と「は」との共起の例として古典語において頻繁に見出されるものとして、

ささの葉は(者)み山もさやに乱るとも吾は(者)妹思ふ

別れ来ぬれば(万 一三三)

わがまたぬ年は来ぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず(古今三三八)

武蔵野は袖ひつばかり分けしかど若紫はたづねわびにき

(後撰 一一七七)

かやうに憎からずは聞こえかはせど、け近くとは思ひよらず(源氏 夕顔)

のような対比の構文がある。今、上述の「も」と逆接助詞との通有性という点を考慮するならば、

「ひとりぬる時はまたる」鳥のねもまれにあふ夜はわびしかりけり(古今八九五)

右のような、「も」を境に「は」が対置されているモハ構文の例を、これらとの関わりにおいて見ることも許されるであろう。

モハ構文における「も」「は」共起の必然性は、以上のような背景の中で理解されるべきであり、この構文はまた、

イカナ本免モ犬ニハ得ラレタソ(毛詩抄 卷十二)

イカ程給テ天子ノ御心ニハアキタラヌソ

(毛詩抄 卷十五)

いや、侍といふてもひだるいことはかんにんはならぬよ

(狂言記 苞山伏)

貴さまの着物も、薄綿になつては夫限だと思はつしやい。

(浮世風呂 前編)

や、冒頭に挙げた現代語の例にも窺われるように、日本語表現

の一形式として、現代にまで脈々と流れ続けているものなのである。

### 【注】

(1) この三分類については沼田(一九八五)参照。

(2) このような「も」が最も原初的な用法であったとする論者は、川端(一九六三aおよびb)、森野(一九九六および一九九七)をはじめ、少なくない。

(3) 「期待」に関しては、井島(一九九六aおよびb)を参照。

(4) 注2川端論文。

(5) ちなみに吉田茂晃も、万葉集中に「逆接構成の『も』が存在する」とを指摘している(吉田 一九九〇)。

### 参考文献

尾上圭介(一九八二)『は』の係助詞性と表現的機能『国語と国文学』五

八巻五号

工藤美紗子(一九六三)『も』という助詞の意味『文学』(岩波書店)三二

巻二二号

川端善明(一九六三a)「助詞『も』の説―文末の構成―」『万葉』四七号

川端善明(一九六三b)「助詞『も』の説―二、心もしのに鳴く千鳥かも―」

『万葉』四八号

沼田善子(一九八六)「とりたて詞」(奥津敬一郎編『いわゆる日本語助詞の

研究』所収)

吉田茂晃（一九九〇）「万葉集における助詞『も』の文中用法」『島大國文』一九号

大野晋（一九九四）『係り結びの研究』岩波書店

森野崇（一九九六）「奈良時代の終助詞『も』に関する考察」『二松学舎大学論集』三九

同（一九九七）「奈良時代の係助詞『も』に関する考察」『二松学舎大学論集』四〇

井島正博（一九九六a）「期待の表現機構」『成蹊大学文学部紀要』二二九号

同（一九九六b）「期待表現の体系」同 三〇号

なお本文の引用は岩波の新大系本によった。ただし、表記等、若干改めた箇所がある。

付記 本稿は平成十三年度提出修士論文の一部に加筆訂正したものである。  
(さかた かずひろ／本学大学院博士課程)